熊本大学学術リポジトリ

秋瑾詩詞全釈（その二）

著者	吉川 榮一
雑誌名	文学部論叢
巻	90
ページ	65-88
発行年	2006-03-05
その他の言語のタイトル	Explanatory notes on the whole poems of Qiu Jin <2>
URL	http://hdl.handle.net/2298/2684

〔注解〕

秋瑾詩詞全釈　（その二）

吉川榮一

Explanatory Notes on The Whole Poems of Qiu Jin <2>

Eiichi YOSHIKAWA

要旨

Qiu Jin（秋瑾 1875-1907）is well known as a prominent female revolutionist of modern China. She is also a female poet representing the Qing（清）dynasty last stage. This paper is the second part of Chapter 1 in a series of trials which introduces all the poetry of Qiu Jin to the order which she created. I add notes and an interpretation to all the works of Qiu Jin. In this part, I am treating the poetry created around 1893 when she lived in her hometown Shaoxing（紹興）and Changsha（長沙）where her father worked as a local bureaucrat. Those days, she was 18-19 years old. Therefore, it can be said that these poetry is the works created at her early days.

キーワード　秋瑾

前　言

秋瑾の詩文を集めたものとしては、一九〇七年に刊行された王芷馥編『秋瑾詩詞』以降、数種が世に出ているが、今日もっとも信頼に足るテクストとしては、それまでに出版された詩文集を基礎に遺漏を補い、一九六〇年にまず中

華書局上海編輯所から出版され、その後さらに修訂を経て一九九一年に上海古籍出版社から刊行された『秋瑾集』であろう。

近年になって、『秋瑾全集箋注』（郭長海・郭君兮輯注、吉林文史出版社、二〇〇三年）、『秋瑾選集』（郭延礼選注、人民文学出版社、二〇〇四年）と、立て続けに秋瑾の注解付きの詩文集が発行されるにいたった。両者とも拠り所としているのは『秋瑾詩詞』以来の数種の詩文集であるが、惜しむらくは、いずれの選集も完全な編年による編集ではない。収録されている詩について見ると、近著二書のうち『秋瑾選集』は、「第一期　出国前」「第二期　留日時期」「第三期　帰国後直至就義」の三期に大きく分けられているものの、それぞれの時期のなかに入れられている詩は、必ずしも創作順ではなく、特に第一期はかなり入り乱れているように感じられる。一方の『秋瑾全集箋注』は、編年体ではなく分体による編集であり、秋瑾の好んだ詩体を窺うには便利であるが、秋瑾の詩作がどのように移り変わっていったのかを窺うことはできない。同書はそれぞれの詩について創作時期を推定しているものの、同書の推定創作時期は必ずしも『秋瑾選集』と一致していない。

拙稿は、上海古籍出版社版『秋瑾集』を基礎とし、近著二点を参照しながら、秋瑾の全詩作をできる限り創作された順に復元しつつ注釈を加えようとする試みであり、『文学部論叢』第八七号掲載の「秋瑾詩全釈初稿（その一）」に続き、彼女の少女時代の詩を取り上げる。

第一章　少女時代（二）　浙江省紹興～長沙

秋瑾は、一八八九年の末に原籍地の浙江省紹興に初めて戻り、この地で三年余りを過ごしたとされている。その後、一八九三年春には、父親の秋寿南（一八五〇～一九〇一）に従い湖南省長沙に移り、ここで数か月を過ごした。さらに、その年の末頃に、常徳を経て、湘郷、湘潭へと住まいを移している。本稿で扱うのは、彼女の紹興時代および長沙時代の作品である。一八七五年生誕説に従えば、秋瑾の十八、九歳頃に当たる。(注一)

白梅

仙人縞袂倚重門
笑擲明珠幻絮魂
淡到羅浮忘色相
謫來塵世具靈根
洛妃玉骨風前影
倩女冰姿月下痕
獨立自憐標格異
肯因容易便承恩

仙人縞袂まとい　重門に倚り
笑ひて明珠を擲たば　絮魂と幻す
羅浮に淡い到り　色相を忘れ
謫せられて塵世に來り　靈根具ふ
洛妃の玉骨　風前の影
倩女の冰姿　月下の痕
獨り立ち　自ら憐む　標格の異れるを
肯へて容易に因り便く恩を承けん

仙女が白絹の衣をまとったような美しい白梅が、大きなお屋敷の門に寄り添うように咲いている。
まるで仙女が笑いながら投げた真珠が、柔らかな梅の花に変化したかのよう
夢の中で、かの羅浮山に漂い来てみれば、この俗世の全てを忘れてしまう
あの梅の木は、この世界に流されて、いつしか根を生やしてしまったものなのかしら
その美しさは、洛妃の気高い姿が風にそよいでいるかのよう
気品漂う麗しい少女が月影の下で佇んでいるかのよう
誰にも頼ることなく一人すっくと立ち、他の花々とは別格の気品を自ら愛しむ
どうして易きにつくようにたやすく人の恩寵を承けられようか

○縞袂　白絹の衣服の袖。ここでは、梅の白い花を仙人のまとった白絹の衣裳になぞらえている。明・高啓〔梅花、九首、二〕詩に「縞袂相逢半是仙、　平生水竹有深縁」とあるのを踏まえたものか。　○重門　幾重にも重なった門　○明珠　光る玉、真珠などの宝石

の類。　○幻　変わる、変化する。　○絮魂　おぼろに咲く白く柔らかな梅の花を指す。　○羅浮　羅浮山、羅山と浮山を合わせて言う。広東省東江北岸にあり、東晋の葛洪が仙術を得たところと伝えられ、山麓に梅が多い。隋の趙師雄がこの地において夢で梅花仙女に出会ったと伝えられる。（柳宗元「龍城録」）　○色相　形あるすべてのもの。　○霊根　植物の根の美称。　○洛妃　洛神すなわち洛水に落ちて洛水の神となった、伏羲の娘・採妃。　○玉骨　高潔な風格をいう。また、梅の木をも指す。　○倩女　麗しい少女。　○冰姿　清らかで上品な姿。玉骨とともに、梅の淡雅な美しさの形容としてよく用いられる。　○月下痕　月痕、月影。　○標格　高雅な品格

詠白梅（七律）

雪玉妝成千萬枝
冰霜雅操最宜詩
花壇獨歩盈盈立
嫩蕚含葩淡淡姿
仙子白衣初謫降
佳人素袂最相思
孤山處士空唐突
未許門牆堊粉施

雪玉（せつぎょく）の妝成（しょうせい）る　千萬の枝
冰霜の雅操　最も詩に宜しかるべし
花壇に獨歩し　盈盈として立つ

嫩蕚（どんがく）の含葩（がんは）　淡淡たる姿
仙子の白衣　初めて謫降す
佳人の素袂（そべい）　最も相思ふ
孤山處士　空しく唐突
未だ門牆に堊粉（あくふん）を施すを許さず

白い宝玉かと見まごう梅のつぼみが千万の枝にびっしりとついている。
汚れなき気高い風格こそ、最も詩に相応しい。
花々の並ぶ庭でひときわ優雅な姿で立つ
みずみずしい蕚に包まれたつぼみの飾り気のない美しさ。
それはまるで、世に流されてきたばかりの仙女の白い衣のよう。
美しい女性の白い衣の袖こそ　心寄せるに最も相応しい。
かの孤山の処士林和靖は自分ばかりが空回りして梅に思いを寄せて
未だ門や垣を真っ白く塗ることを認めてはいない。

○雅操　正しい操。　○獨歩　他に並ぶものがないほど優れていること。　○盈盈　女性の容姿がゆったりとして美しいさま。　○嫩蕚　みずみずしい柔らかな花の蕚。　○含葩　花のつぼみ。　○素袂　白い袖。　○孤山處士　林逋（和靖、九六七～一〇二八）を指す。梅と鶴をこよなく愛したことで知られる。　○唐突　礼を失する。　○門牆　門と垣。　○堊　白い土、漆喰。（注）

詠白梅（七絶）

淡妝別具好丰神
小謫瑶臺悟夙因
不遇師雄來月下
如何空現女郎身

淡妝　別に好丰神を具ふ
小くして瑶臺より謫されしに　夙因あるを悟る
師雄に遇わずして　月下に來る
空しく女郎の身を現わすを如何せん

清楚なすがすがしい装いには格別優美な気品が漂う
若くして仙境からこの俗世に流されてきたのには、きっと前世からの因縁があったのでしょう。
可哀想にこの白梅は、かの趙師雄にまみえることもなく、月の光の下で花を咲かせている。
仙女の姿に身を変じてみても、趙師雄がいないのでは全くいかんともしがたいことだ

○淡妝　清楚な装い。　○丰神　優美な気品。　○瑶臺　仙人の住む高殿。　○夙因　前々からの原因。前世からの因縁。宿縁。　○師雄　羅浮山において夢で梅花仙女に出会ったと伝えられる隋の趙師雄。（柳宗元「龍城録」）　「白梅」詩の語注参照。　○女郎　少女。若い娘。

題芝龕記　八章　　董寅伯之王父所作傳奇

今古爭傳女狀頭
紅顏誰説不封侯
馬家婦共沈家女
曾有威名振九州

今古　爭ひ傳ふ　女狀頭
紅顏　誰か説はん　侯に封ぜずと
馬家の婦　と　沈家の女
曾て　威名　九州に振ひし有り

今も昔も皆が先を争うように口々に言い伝える女状元。
女は諸侯に報じられることなどないと、いったい誰が言うのかしら。
馬家の妻・秦良玉と　沈家の娘・沈雲英
この二人は、かつて中国全土にその威名を鳴り響かせたんだから。

○『芝龕記』　董寅伯の祖父董榕（一七一一～一七六〇）の著した伝奇。董榕は、豊潤（今は河北省に属す）の人、字は念青、また恒岩、号は謙山、また繁露楼主人といい、九江知府を勤めたという。『芝龕記』は明代の二人の英雄的な女性、秦良玉と沈雲英の事績を物語ったもの。　○状頭　状元。科挙試験の第一位合格者。　○紅顏　ここでは女性を指す。　○封侯　諸侯に封ずる。　○馬家婦　石砫

宣撫使・馬千乗の妻、秦良玉（一五七四、一説に一五八四～一六四八）。忠州（今の四川省忠県）の人。常に男装をして戦場で功を上げ、夫の死後、夫に代わり兵を率いて闘い、都督僉事を授けられた。　○沈家女　沈雲英（一六二三～一六六〇）浙江省蕭山の人。父の沈至緒が張献忠の軍勢に殺された際、父の亡骸を奪い返し、その後も頑強に抵抗し、明烈帝に遊撃将軍の称号を授けられた。[注三]　○九州　中国全土、天下。

搘撑乾坤女土司
將軍才調絶塵姿
靴刀帕首桃花馬
不愧名稱娘子師

乾坤を搘撑す　女土司
將軍の才調　絶塵の姿
靴刀　帕首　桃花の馬
名を娘子師と稱するに愧じず

かの秦良玉は、天地を支える女性地方長官、
軍を率いる彼女の才知は、なみの人々を遥かに超えている。
靴に潜ませた短刀、頭に巻いた頭巾、颯爽と跨る桃花馬
なるほど女性将軍の名に恥じない、その凛々しい姿。

○搘撑（したう）　支える。　○乾坤　天と地。　○土司　主として中国西南地域において少数民族を治めた世襲の地方官。ここで言う女土司は、秦良玉を指す。　○才調　才気、才知。　○絶塵　世俗から超絶していること。ここでは、世人を超越していること。　○靴刀　靴の中にひそませた短刀。一説に、靴のように湾曲した形の刀。　○帕首　頭に巻く布。　○桃花馬　白い毛の中に赤い毛の混ざった毛色の馬。　○娘子師　女性の率いる軍隊。

莫重男兒薄女兒
平臺詩句賜蛾眉
吾儕得此添生色
始信英雄亦有雌

男兒を重んじ女兒を薄（うす）んずるなかれ
平臺の詩句　蛾眉に賜ふ
吾儕（わがせい）　此を得て　生色を添ふ
始めて信ず　英雄にまた雌有るを

男性を重んじ女性を軽んじてはならない。
帝が平台で女性である秦良玉に詩をお与えくださったのだから。
私たち女は、このことでいっそう精彩を放つことができ
英雄ばかりではなく英雌もいることが初めてわかったわ。

○平臺　明代、群臣を召見したところ。『明史』「秦良玉傳」に、崇禎帝が、秦良玉を平台に召見したとの記載がある、「崇禎三年……中略……莊烈帝優詔褒美、召見平臺、賜良玉綵幣羊酒、賦四詩旌其功。」（『明史』巻二百七十「列傳第一百五十八　秦良玉」、中華書局版『明史』二三、六九四六頁。）　○蛾眉　蛾の触覚のような眉。転じて美しい女性のこと。　○吾儕　我々。　○添生色　生き生きとした色つやを増す。輝きを増す。

百萬軍中救父回
千羣胡馬一時灰
而今浙水名猶在
想見將軍昔日才

百萬の軍中　父を救ひて回る
千羣の胡馬　一時に灰す
而今　浙水に　名　猶ほ在り
想ひ見ん　將軍　昔日の才

百万の敵勢の中から父の亡骸を奪い返して戻った沈雲英
無数の敵兵は、たちまち色を失った。
今にいたるもなお浙江にその名を轟かせている
沈雲英将軍の昔日の優れた才知が慕わしく想われる。

○救父回　張献忠の軍勢に殺された父の亡骸を沈雲英が奪い返したことを言う。　○胡馬　北方西方の少数民族を「胡」というが、ここでは沈雲英の敵の軍隊を指す。　○浙水　浙江すなわち銭塘江をいう。ここでは浙江省一帯を指す。

謫來塵世恥爲男
翠鬢荷戈上將壇
忠孝而今歸女子
千秋羞説左寧南

謫せられて塵世に來(きた)り　男爲(た)るを恥ず
翠鬢に戈(ほこ)を荷(にな)ひ將壇に上る
忠孝　而今　女子に歸す
千秋　説(い)ふを羞ず　左寧南

仙界から流されてこの世に流されてきた者は、男の姿に生まれ変わることを恥とする。
みどりの黒髪の女性でありながら、武器を取り兵を率いた秦良玉。
忠孝は今や女性のもの。
かの左良玉のごときは、とこしえに口にするのも恥ずかしい。

○翠鬢　漆黒の鬢の毛、みどりの黒髪。ここでは転じて女性を指す。　○戈　ほこ、武器。　○將壇　将台、軍隊の指揮台、もしくは

閲兵台。　○左寧南　明末の武将・左良玉（一五九九～一六四五）のこと。左良玉、字は崑山、山東・臨仙の人。崇禎十七年、軍功により寧南伯に報じられたが、結局明の滅亡を救うことはできないまま没した。（『明史』巻二百七十三「列傳第一百六十一　左良玉」、中華書局版『明史』二三、六九八七～六九九八頁）

忠孝聲名播帝都
將軍報國有良姝
可憐不倩丹青筆
繪出娉婷兩女圖

忠孝の聲名　帝都に播し
軍を將る國に報ずる良姝有り
憐れむ可し　丹青の筆を倩りて
娉婷たる兩女の圖を繪き出さざりしを

忠孝の名声は、帝都に広く鳴り響いている。
軍隊を率い国に尽くした美しい女性がいたのだ。
ああそれにつけても残念なのは、絵師の手によって
麗しい二人の姿を描き出さなかったこと。

○播　広く伝わる。　○良姝　あでやかで美しい女性。　○倩　借りる、請う。　○丹青筆　絵の具あるいは絵師、画家。丹青は朱色と青色の絵の具、転じて絵の具一般。　○娉婷　女性のしとやかで美しいさま。

結束戎妝貌出奇
個人如玉錦駝騎
同心兩女肩朝事
多少男兒首自低

戎妝（じゅうしゃう）に結束すれば　貌（すがた）　出奇たり
個人（この）　玉の如く　錦駝に騎（また）る
同心の兩女　朝事を肩（にな）ひ
多少の男兒　首自（かうべおのづ）ら低くす

戦装（いくさ）束をまとった秦良玉と沈雲英のその姿は人目を驚かす。
その顔（かんばせ）は玉のように美しく、錦で華やかに飾り立てた駱駝に跨り凱旋する。
心を一（いつ）にする二人の女性は、今や国の政（まつりごと）を担っている。
多くの男子は、彼女たちを前にすると、自然と頭を垂れてしまうことだ。

○結束　出陣の身支度をすること。　○戎妝　軍装、戦装束。　○出奇　普通でないこと、変わっていること。　○錦駝　美しく飾り

立てた駱駝。押韻の関係で、「錦駝」が「騎」の前におかれている。　○朝事　朝廷のまつりごと。朝政。

肉食朝臣盡素餐
精忠報國賴紅顔
壯哉奇女談軍事
鼎足當年花木蘭

肉食の朝臣　盡（ことごと）く素餐
精忠報國　紅顔に頼る
壯なる哉（かな）　奇女　軍事を談じ
鼎足す　當年の花木蘭と

美食の限りを尽くす高官どもはみな無為徒食の徒。
真に忠義を尽くして国の恩に報いるのは女性なのだ。
何と勇ましく立派なことか、人並み優れた女性が軍事を論じている。
秦良玉と沈雲英の二人は、いにしえの花木蘭と並び立っていることだ。

○肉食　贅沢な食べ物を食べられる者。高禄の官吏。　○素餐　功労もないのに高い地位についていること、無為徒食。　○精忠　真心からの忠義、純忠。　○紅顔　ここでは女性を指す。　○奇女　抜きんでた女性。非常に優れた女性。　○鼎足　鼎（かなえ）の三本の足のよう

に三者が並び立っていること。　○花木蘭　父に代わって男装して従軍し、功績を立てた伝説中の孝女・木蘭のこと。木蘭については、朱姓とするもの、魏姓とするものがあるが、秋瑾は花姓として、花木蘭と称している。

踏青記事　四章

女鄰寄到踏青書
來日晴朗定不虚
妝物隔宵齊打點
鳳頭鞋子繡羅襦

女鄰　寄せ到る　踏青書
來日　晴朗なれば　定めて虚しからざれと
妝物（しゃうぶつ）　宵を隔てて　齊（ひと）しく　打點す
鳳頭の鞋子（くつ）に　繡羅（しうら）の襦

隣に住むお友達が、ピクニックに誘うお手紙をくださった。
「明日は良いお天気だから、お約束を破ってはいやよ」
身に着けていくものは、前の晩からすべてすっかり準備したわ。
鳳凰の縫い取りのついた靴に、刺繍のきれいな薄絹の上着。

○踏青書　踏青に誘う手紙。踏青は、春の野遊び。清明節（陽暦四月五日ころ）前後に行われた、郊外へのピクニック。　○來日　明日。　○妝物　身に着けるもの。装身具や衣裳。　○隔宵　前の晩。　○打點　整える。準備する。　○鳳頭鞋子　鳳凰の縫い取りのある靴のことか。　○繡羅襦　刺繍を施した薄絹の短い上着。

曲徑珊珊芳草茸
相攜同過小橋東
一灣流水無情甚
不送愁情送落紅

曲徑　珊珊　芳草　茸（しげ）る
相（あ）ひ攜へて　同（とも）に小橋の東を過ぐ
一灣の流水　無情なること甚だし
愁情を送らず　落紅を送る

曲がりくねった細い道を歩いていくと、帯に付けた玉の飾りが涼やかな音を立て、あたりに茂った草からは春めいた草の香りが漂ってくるわ。
ふたり手を取り合って一緒に小さな橋を東に渡りながら、水面をみると、
弓なりに流れていく水の流れったらひどいわ。
悲しい気持ちを流し去ってくれないで、赤い花びらを流してしまうんだもの。

○曲徑　曲がりくねった小道。　○珊珊　佩玉の鳴る音。佩玉とは、帯に掛けて飾りとした玉のこと。　○芳草　かおりのよい草。
○茸　草が盛んに茂ること。　○落紅　落花。木から落ちた赤い花びら。

柳陰深處囀黄鸝
芳草萋萋緑滿堤
笑指誰家樓閣好
珠簾斜捲海棠枝

柳陰の深き處　黄鸝囀り
芳草　萋萋（せいせい）として　緑　堤に満つ
笑ひて指さす　誰の家の樓閣か　好（よ）からんと
珠簾　斜めに捲く　海棠の枝

柳の木陰の奥の方で高麗鶯がきれいな声で鳴き、
春の草が青々と茂り、川べりの土手はむせかえるような緑一色。
どちらのお屋敷がすてきかしらと、笑顔で指差し合う。
珠すだれを少し巻き上げてある、海棠の花の咲いているお宅かしら。

○黄鸝　こうらいうぐいす。　○萋萋　草が茂るさま。唐・崔顥「黄鶴楼」に「晴川歴歴漢陽樹、芳草萋萋鸚鵡洲」とあるのを踏まえ

たものか。　○珠簾　珠すだれ。

西鄰也爲踏青來
攜手花間笑語纔
昨日卿經賈傅宅
今朝儂上定王臺

西鄰　也　踏青の爲に來る
手を携へて　花間　纔かに笑語す
昨日　卿　賈傅宅を經ぐ
今朝　儂　定王臺に上る

西隣に住んでいる方も、ピクニックにやってきたわ。
春の花に囲まれて、手を取ってお話ししているうちに、次第にうち解けてきたこと。
「昨日あなたは、むかし賈誼が住んでいたあたりにいかれたでしょう。
今日、わたしは定王台に登るのよ。」

○纔　はじめて。ようやく。押韻の関係で、「纔」と「笑語」が逆におかれている。　○卿　あなた、きみ。　○賈傅宅　賈傅祠。湖南省長沙にある、かつて賈誼の住んでいた邸宅。前漢の学者・賈誼（二〇〇～一六八BC）は、若くして博士となったが、のちに左遷さ

れて長沙王の太傅となり、賈太傅、賈長沙などと称せられた。○定王臺　漢の景帝の子で長沙王となった劉發が築いた台。

題郭調白宗熙湘上題襟集即用集中杜公亭韻　二章

江南又見賀方回
遮莫樽前擊鉢催
子夜豪歌瓊樹膩
卯橋風月鳥聲哀
由來名士耽詩酒
從古江山助逸才
領略梅花與巖翠
暗香濃緑筆端來

江南　又　見る　賀方回
遮莫　樽前　鉢を擊ちて催す
子夜の豪歌　瓊樹　膩やかにして
卯橋の風月　鳥聲　哀し
由來　名士は詩酒を耽しみ
古へより　江山は逸才を助く

梅花與巖翠とを　領略し
暗香　濃緑　筆端より來る

江南の地に再び賀方回のような優れた詩才の持ち主があらわれた。
ままよと、酒樽を前にして　かの蕭文琰のごとくたちまちのうちに詩を吟ずる。
夜ふけるまで思いのままに詠うその詩からは、高潔な気品が細やかに感じられ、
卯橋の風月を詠った詩からは、哀調を帯びた鳥の声が聞こえてくるようだ。
元来、優れた人物は詩や酒を楽しむものであり、
昔から、美しい山河は逸材が才能を発揮するのを手助けしてきた。
梅の花と岩上に生えた竹の美しさを描き出した詩に、
ほのかな梅の香りと、したたるような竹の濃い緑が、みごとに表されていることだ。

○郭調白　郭宗熙（一八七八～?）のこと。調白は字、湖南長沙の人。清末の進士であり、翰林院編修を授けられた。のちに日本の法政大学に学び、吉林省省長、国立京師図書館館長などを歴任した。[注四]『湘上題襟集』は郭宗熙の詩詞を集めたもののようであるが、未見。　○杜公亭　七六九（大暦四）年春、潭州（今の長沙）から湘潭に向かうとき作った「發潭州」中に「岸花飛送客」という一句があることに因み、後に湘江西岸に「岸花亭」を築き記念としたという。杜公亭は、この「岸花亭」の別称。[注五]なお、「發潭州」は次の通り。「夜醉長沙酒、曉行湘水春。岸花飛送客、檣燕語留人。賈傅才未有、褚公書絶倫。高名前後事、回首一傷神」　○賀方回　宋の詞人・賀鑄（一〇五二～一一二五）、方回は字。衛州（今の河南省輝県）の人であるが、晩年は江南に隠居し、慶湖遺老（鑑湖遺老）と号した。ここでは、郭宗熙を賀方回になぞらえている。　○擊鉢催　擊鉢催詩。竟陵王蕭子良が夜に文士を集めて詩を作らせたおり、蕭文琰が、銅の鉢を打った音がやまないうちにたちまち詩を吟じた故事。ここでは、郭宗熙の詩才の秀でていることを表す。　○子夜　楽府の詩題である「子夜歌」（「子夜呉歌」）を指している可能性もあるが、「子夜歌」は多く男女の恋歌であり、ここでは単に、真夜中の意で用いているのではあるまいか。　○豪歌　優れた歌、あるいは、思いのままに歌う。　○瓊樹　崑崙山の西にあるという、玉のなる珍しい木。人格が

優れていることの例えとしても用いられる。　○賦　きめ細やかで潤いのあること。　○卯橋　郭延礼選注『秋瑾選集』では、浙江餘江にある卯水上の橋とするが、根拠不明。また、郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集　箋注』では、江蘇鎮江城南にある「丁卯橋」のこととしているが、丁卯橋を卯橋と約めていうことがありうるかどうかは不明。ただ、陸游「丁卯橋」に「若論風月江山主、丁卯橋應勝午橋」とあり、秋瑾のこの詩との関連を窺わせる。待考。　○由來　元来、もともと。　○江山　山河、美しい自然の景色。　○逸才　逸材。並はずれた才能、その持ち主。　○領略　悟る、理解する。　○巖翠　岩山に生えた竹のことか。　○暗香　それとなくほのかに漂うかおり。　○筆端　筆さき、筆運び。

賈傅祠前載酒回
新聲纔賦管絃催
二分明月珠簾捲
十丈勞塵畫角哀
繡虎漫拋詞客力
聞鷄好奮濟川才
他年書勒燕然石
應有風雲繞筆來

賈傅祠（かふし）の前　酒を載（の）せて回（かへ）る
新聲　纔（はじ）めて賦（うた）はば　管絃　催（もよほ）す
二分の明月　珠簾を捲き
十丈の勞塵　畫角　哀し

繡虎（しうこ）漫（そぞ）ろに抛（なげう）つ　詞客の力
聞鷄（ぶんけい）　好（よろ）しく奮ふ　濟川の才
他年　燕然石に書勒すれば
應（まさ）に風雲の筆を繞（めぐ）りて來（きた）る有るべし

賈傅祠の前を通って　酒を携えて家に戻り
新しい詩をちょっと口ずさむと、管弦にのせて歌いたくなってくるほどの出来映え。
二分の明月を珠簾を捲いてうち眺め、
立ち上る戦塵の下で奮戦する兵士の身を案じたその詩は、
かの曹植にも劣らぬ、詩人としての優れた才能をこともなげに披露し
かの祖逖にも匹敵する、国を支える志士仁人の英気をほとばしらせている。
いずれに日にか、天晴れの勲功が碑に刻まれた暁には、
その優れた才気がその文字から立ち上ってくるに違いない。

○賈傅祠　前掲の、長沙にあるかつて賈誼の住んでいた邸宅。　○新聲　新たに書いた詩。　○纔　ようやく、はじめて。　○二分明月　徐凝「憶揚州」に「天下三分明月夜、二分無頼是揚州」を踏まえたものか。　○勞塵　兵士の上に舞い上がる戦塵の意か。不詳。　○畫角　絵の描いてある角笛。兵士の志気を鼓舞するのに用いる。杜甫「野老」に「王師未封収東郡、城闕秋生画角哀」を踏まえたものか。　○繡虎　美しい詩文を作ることに長じている者を指す。「曹子建七歩成章、世人目繡虎」（『世説新語』「賞譽」）。ここでは、郭宗熙の詩才が曹植のように優れていることをいう。　○漫　そぞろに、何ということもなく、労せずして。　○聞鷄　聞鷄起舞。『晋書』「祖逖傳」に「（祖逖）中夜聞荒鷄鳴、蹴（劉）琨覺曰、此非悪聲也。因起舞。」とあり、「聞鷄（起舞）」は、志士仁人が奮い立つこと、または、発憤して立ち上がる志士仁人を指すようになった。ここでは、郭宗熙が祖逖のような気高い人格の持ち主であると持ち上げて言う。　○濟川才　帝王を補佐する能力。濟川とは、川を渡ることであるが、『書・説名上』に「爰立作相、王置諸其左右、命之曰、……若濟

巨川、用汝作舟楫」に因み、帝王を補佐する比喩となった。清の顧炎武「贈黄職方師正」にも、「黄君濟川才、大器晩成就」とある。○勒　石などに刻むこと。　○燕然石　燕然山の石。功績を刻む石。後漢の竇憲が匈奴を破ったおり、その功績を燕然山の石に刻んだ故事による。　○風雲　優れた才能。気高い志。

注

（注一）　本稿は、上海古籍出版社版の『秋瑾集』（一九九一年新一版）を底本とし、先行する郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集　箋注』（五八～五九頁、吉林文史出版社、二〇〇三年）および郭延礼選注『秋瑾選集』（人民文学出版社、二〇〇四年）を参照した。

また、「秋瑾詩全釈初稿　（その一）」でも述べたとおり、拙稿では、秋瑾の伝記的事実については、王去病・陳徳和主編『秋瑾研究叢書第二輯　秋瑾年表（細編）』（華文出版社、一九九〇年。以下『秋瑾年表』と略称）に依拠した。『秋瑾年表』に拠れば、一八九三年の項に、秋宗章「関於秋瑾與六月霜」に基づき「春　秋寿南携眷入湘、先到長沙」と記載している。

（注二）　郭長海・郭君兮輯注『秋瑾全集　箋注』（五八～五九頁）に拠れば、古代建築において、門牆に塗るのは黄色が正色であり、白色は悪色であるため、白梅を白い門牆内に植えることは梅を冒涜するようなことであるとしている。なお、同書は、「未許門牆堊粉施」の「堊」を「網」としている。

（注三）　『中国婦女名人辞典』（袁韶瑩・楊瑰珍　編、北方婦女児童出版社、一九八九年）、『中華古今女傑譜』（高魁祥・申建国　編、中国社会出版社、一九九一年）等、参照。

（注四）　徐友春主編『民國人物大辭典』（河北人民出版社、一九九一年）、橋川時雄纂『中國文化界人物總鑑』（中華法令編印館、一九四〇年）等、参照。

（注五）　前掲『秋瑾全集　箋注』に記すところに拠る。（八一～八二頁。）また、王士青編『杜詩便覧』（四川文藝出版社、一九八六年）をも参照した。